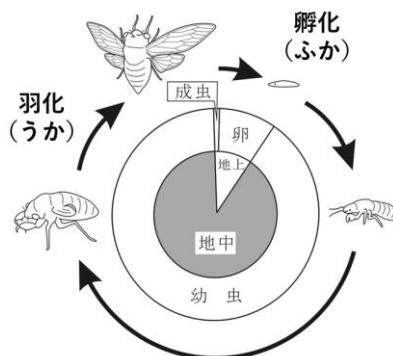


41. セミの孵化（ふか）を見てみよう

大阪公立大学 総合技術課

1. 子どもたちへのメッセージ

みなさんはセミの卵を見たことがありますか？
大阪でよく見られるクマゼミは木の枯れ枝に卵を産みつけます。夏に産まれた卵は、冬を越して、1年後の夏の雨の日に、卵から孵化（ふか）して幼虫になり、土にもぐります。土の中で6～8年間、木の根から栄養をとって育ち、大きくなった幼虫は地上に出て、羽化（うか）して成虫になります。成虫の寿命は1か月ほどですから、一生のほとんどが土の中の幼虫期間です。クマゼミの卵が孵化（ふか）して幼虫になり、枯れ枝の中から出てくる様子や歩き回る様子を観察します。



セミの一生（参考資料を引用、改変）

2. よういするもの

クマゼミの卵が産みつけられたささくれ（産卵痕）（さんらんこん）が見られる枯れ枝（写真）、ルーペ、黒い画用紙

3. やりかた

- ① 7月上旬から8月上旬に、公園などで産卵痕のある枯れ枝（写真）を拾い集めます。
- ② 枯れ枝を水に10～15分間浸します。水から出し、ペーパータオルで水分をとります。
- ③ 10分から1時間待ち、枝から幼虫が出てくる様子や脱皮して歩き回る幼虫をルーペで観察します。



卵が産みつけられた枯れ枝

4. わかること

セミは一生の大半を土の中で成長し、謎の多い生き物です。特に、雨の日に卵から孵化した幼虫は、1時間以内で土に潜るため、見られることはほとんどありません。しかし、公園などで落ちている枯れ枝を水に浸けることで雨の日と同じにすると、セミの卵が孵化し、産まれたばかりの幼虫を見ることができます。なぜ、セミの卵は雨の日に孵化するのか、なぜ大阪の都市部でクマゼミが増えたのか、考えてみましょう。

5. 気をつけよう

枝が目にあたらないように気をつけましょう。

6. 問い合わせ先

大阪公立大学 総合技術課 TEL 06-6167-1240

7. 参考になる資料

沼田英治、初宿成彦、『都会にすむセミたち温暖化の影響？』海游舎(2007)
沼田英治、『クマゼミから温暖化を考える』岩波ジュニア新書(2016)



脱皮して歩き回る幼虫